

温泉津温泉と石見銀山のかかわり

郷土史研究家 石村 勝郎

発見伝説

石見国は日本のさいはての地といわれたり、黄泉国の発音がなまって石見となったと称されるなど、岩石の多い、遠い国として扱われてきた。

このたび日本温泉科学会大会が、そのさいはての地で開かれたことは、この地域にとって忘れてたいできごとの一つとなるに違いない。

湯泉津温泉は、石見の国の地形を、そのまま表徴したような地域にある。両側が100m前後の山で、峡谷に現出した温泉街、この温泉街の端っこで、港に面したところは「橋の階」という地名、これは「峡の端」ということで、地形をそのまま文学的に表現しているといえる。

温泉の発見は1000年前と伝える。ある年のある日、旅をしていた僧が現在の湯町の、小屋で一晩を過したところ、突然の雷雨と共に妖怪があらわれた。護身用として持っていた短剣で斬ったところ、怪しい影が消えて、雨も晴れた。翌朝、滴っている血のあとをたどって行くと、そこに温泉があって、古タヌキが前夜うけた傷を温泉に浸して、手当をしているのが見つかった。

たいていの温泉が、高僧とか神様が見つけたり、開発していて、発見伝説が神秘的なのに対し、タヌキが登場することは庶民的で愛敬があ

タヌキには八相があるといわれる。つまり「愛敬」「知恵」「音楽」「金運」など客商売にはもってこいの「相」を備え、江戸時代には飲食店の玄関に、やきもののタヌキが立ったりしている。いうならば「客を招き」「客をだまし」「金をもうける」ことであり、温泉津温泉の発見伝説に、タヌキを登場させる創作者のフィクションは心憎い。

温泉という字が二つも重なる温泉津温泉は、需亀元年（715）に郷が設けられたとき温泉郷とあらわれるのがもとになって、のちに温泉のある港（津）として、温泉津となったもの。ゆのさが「湯里」になった地域が隣接地にある。

地名の歴史をたどっていくと、温泉がゆう出し、その温泉が地名となるほど知られていたのが、すでに1200年以上も前だとすれば、旅僧がタヌキの幻影におびえて斬りつけた発見伝説が、1000年余り前のできごとというのもうなづける。

このように古い歴史が地名の歴史からくみとれるが、温泉そのものの歴史は、資料の中から全くうかがうことができず、江戸時代前後になってやっとその動きがあらわれてくる。

石見銀山とのかかわり

石見銀山は温泉津の隣りの湯里から、降露坂という標高300m余りの山を越えたところにあつて、温泉津温泉は、この石見銀山と興亡をともししてきた。

石見銀山とはいえば「石見銀山ネズミとり」で知られている。江戸時代のお家騒動などで悪用され、相手を毒殺する毒薬の名になっている。実際は同じ幕府の銀山領でも、石見の西の端っこにある笹ヶ谷の銅山の、砒素が使われ、銀山とは無関係だが、銀山領にあるため、そのネームバリューから石見銀山ネズミとりになってしまったもの。

石見銀山の発見は古く、鎌倉時代の終わりで、いまから700年近くも前のことで、よく知られ

ている佐渡、伊豆、生野の鉱山などは、石見銀山より、はるかに遅い開発で、佐渡金山は石見銀山の人のよりに初めて発見され、伊豆や生野などにも、石見から技術者が出かけて開発している。

室町時代は周防（山口県）の大内氏と出雲（島根県）の尼子氏が銀山をめぐる対立、大内氏が家臣の陶晴賢にほろぼされ、陶氏が毛利元就によって誅殺されると、毛利氏と尼子氏が対立、やがて徳川家康の天下統一となると、江戸幕府の天領となる。

徳川氏は石見銀山を手に入れることにより、江戸時代 300 年の財政の基礎をかためたといわれる。

ところが、こうしたさまざまなドラマの中で、温泉津が初めて顔を出してくるのは大永 6 年（1526）の春のこと。

温泉津と同じ邇摩郡の仁摩町馬路の沖で、千石船の上から銀光が輝く銀の山を望見した九州博多の豪商、神屋寿貞が、腹心の技術者 3 人を連れて上陸するのが温泉津港で、ほかに銀山に近い馬路や仁万、宅野などがあるのに、ここを避けて既に本格的開発をもくろんだ寿貞が、ふところの深い温泉津港を、開発のときの銀の積出港としてビジョンに浮べて、下見を兼ねて上陸地に選んだと想像される。

室町時代から江戸時代の初めにかけて、武将の古文書の中に温泉銀山といった呼び方がしばしば登場する。例えば毛利方の吉川元春や石見銀山天領の初代奉行、大久保石見守が使っている。これは銀山と一衣帯水にある温泉津港が繁盛し、石見銀山というより温泉銀山とした方が判りやすかったせいだろうと思われる。

鳥取城の城主で、豊臣秀吉に攻められ、100 日におよぶろう城で、食糧が尽き、35 歳の若さで潔く腹を切った吉川経家は、銀山の支配を兼ねていたが、死のまぎわに、吉川元春に対し「温泉大国を息子の亀寿丸に与えてほしい」と遺言している。経家には九代にわたって銀山を管理していた先祖からの思いがあって、この遺言となったのだと思う。銀山を温泉津の名を取り、温泉大国としていることなど、温泉津が重要な役割を果たしていたことがうかがわれる。

永禄 3 年（1560）毛利氏が出雲の尼子氏をほろぼし、銀山を完全占領すると現在の元湯温泉主、伊藤恕介さん（78）の祖先である伊藤新左衛門信重に温泉役を命じている。このときから屋号を湯屋とし、途中で蔦屋に変えているが、徳川家康が全国を支配すると、慶長 5 年（1600）初代奉行となった大久保十兵衛と彦坂小刑部を上使として巡遣し、いったん湯泉役を上納させた上、改めて蔦屋に温泉役を与え、蔦屋は湯屋に再度改めている。

ふところの深い温泉津港には、温泉津、波路浦、小浜、沖泊の 4 つの浦があって、越前や加賀、出羽地方からの入船出船でにぎわった。三葉葵を染めぬいた天領のご用船は、主として因幡の船が当り、上納米などを積んで大阪をめざした。これに準じて天領内の船は「銀山御領御蔵入」の幟をたてて航海し、寄港地では、他の船はとも綱をゆるめ、張綱を解いて天領の船を通し、荷役も優先的に行うなど、いばったものだったという。

今度の大会で、温泉津を訪れられた方々は、温泉街のふんいきに、一般の温泉街とは違った、江戸の商人町のおもかげが、ひそやかにあることを気づかれたのに違いない。

銀山の初代奉行、大久保石見守が温泉町の愛宕山と恵瑠寺の境内の二か所に、逆修墓を建てているのは、石見守が温泉津に意外に愛着をもっていたということになるのではと思われる。

逆修墓とは死後の功德をより多く得るために、生きている間に墓を建てることで、石見守は佐渡、伊豆のほか本拠地の八王子にも建てている。

間歩と間夫の語源

少し許りくださいました話しをして、この原稿を終わりにしたいと思います。

間歩とは銀山の鉦石を堀る坑口のことをさす。ところがこれは間夫と同意義語なのだ。

間夫とは江戸時代の遊女のヒモのことをいう。この間夫の語源が石見銀山であると共に、温泉津温泉の遊女街、稲荷町から発生し、これが江戸へ伝わって行った。

もともと間歩とは石見銀山の方言だったのが、採鉦冶金の先進地である石見銀山から、多数の技術者たちが佐渡や伊豆へ出かけて行った際に、間歩という言葉も運ばれて行った。

さて一方の間夫の語源は、初めの意味は、遊郭に身を沈めた女性に穴をあける役をした男の間夫といていた。

江戸には吉原という遊女街があって、売られてきた不幸な娘たちは、未だ年端もいかぬ幼い娘が多かった。彼女たちは男とちぎる方法を知らない、そこで間夫が男と寝る方法を教えてやる。

遊女はたくさんの男と寝れば寝るほど金がもうかる、つまり穴から金銀が生まれてくるということになる。

鉦山の間歩も同じことで、間歩は掘れば掘るほど金や銀を得ることができる。

鉦山の間歩は、温泉津の遊郭の用語に転用され、やがて江戸へ伝わり、いつしか遊女のヒモのことを間夫というようになった。

鉦山用語はこんなふうに、さまざまに生活の中にはいりこんでくるが、これは室町時代から江戸時代初期にかけての貴金属文化が、私たちが考えている以上、民衆の生活にかかわりをもっていったということかもしれない。

他の例をあげてみると――

「家系がよい」ことを「つるがよい」といったりする。これは石見銀山で鉦脈のことを「鉦」といっていることから出ている。つまり「いい鉦脈」が「いい鉦＝つる」であり、家系のよいことに転用されたもの。またがんこな人のことを「てこでも動かぬ」という。てことは石見銀山では「手子」といい「銀掘り」のことをいう。つまり手子が一生けん命に金づちをふるっても岩が崩れない、手子でさへ動かぬ岩のようにがんこな人という意味になる。

こうしてわれわれが、かつて使っていた古い生活用語を調べてみると、鉦山用語から転じたものが多いのにびっくりする。

江戸時代の初期には、日本経済の六割を支配したといわれるほどの産銀量をもっていた石見銀山であり、ここで使われた方言が、一つのファッションとして民衆の生活へ流れこんでいったのは当然で、その媒体として温泉津港の出船入船があり、遊郭の遊女があったと考えてふしぎではなさそう。

なおつけ足しすると、石見銀山の間歩は、総数で279口あり、銀山と呼ばれる標高537mの仙の山は、ハチの巣のように穴が掘られている。